

巻頭言

東日本大震災 10年の節目と 今後の備え

今村文彦



今年3月11日に東日本大震災から10年を迎えた。東北地方太平洋沖で発生した地震（2011年3月11日午後2時46分頃）は気象庁により平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震と命名され、その震災名は東日本大震災となった。我が国の観測史上最大の巨大地震であり、その直後に沖合で発生した津波も広域に伝播し沿岸域を含めて多大な被害を出した。広域での複合型災害であり、強震の後、津波、液状化、地滑り、火災に加えて原発事故も含めて多様な被害が連鎖して発生し、人類で経験のない被害となった。

震災当時から現在までの間で、数多くの教訓が残されているが、ここでは代表的なものを紹介したい。1つは、【備えは有効であったが、それ以上のことはできなかった】である。突然発生した想定を上回る災害に対しては、初動体制は遅れた。しかし、備えていたことは確実に実践できており、未曾有の災害の中でも被害低減は出来たと言える。例えば、耐震化があり、あの長く強い地震に対しても倒壊した建物は極僅かであった。また、自治体や関係機関との連携協定のお陰で、被災地での初動体制が機能しない中でも迅速な支援をいただいた。また、瓦礫に埋まった沿岸では、余震活動が収まらない中でも道路啓開が行われ、その後の支援活動や復旧活動が迅速に実施することができた。肉親や親族・知人も被災されさらに犠牲になった中でも、建設業などの地域の方々が尽力していただいた姿があった。一方で、出来なかった備えとしては、ハザードマップなどの作成はしていたが、想定を超える範囲で津波が来襲し、適切な避難が出来なかった。避難場所として指定していた学校や地域の施設も津波によりのみ込まれてしまった。当時60万人が浸水範囲に居たと推定され、しかも、家族との安否確認が出来ないがために、沿岸部の自宅に戻り、犠牲になった方も少なからずいた。この経験で我々は、三陸地方での、津波てんでんこという言い伝えを再考することとなった。津波来襲時では一目散に避難しなければ命は助からない、あっという間に来襲する津波の恐ろしさを先人たちは残していた。

当時、来襲状況や甚大な被害の姿を映し出した映像が記録され紹介される中で、我々は、その脅威の力を見せつけられた。しかしながら、時間の経過と共に忘却され得られた経験や教訓が活かされておらず、各地では極端気象による風水害など新たな被害も生じている。このような災害は、まさに現在に猛威を振るっている新型コロナウイルスなどの大規模感染症と多くの類似性・共通性を持つ。人類の歴史の中で、感染症もくりかえされている社会災害の1つであり、何世代か過ぎると経験・体験が忘れられている。今後も様々なリスクが発生する可能性があり、先人達の教訓と知見を活かしながら継続して備えて対応できるレジリエント社会づくりが求められている。

現在、東日本大震災の被災地では、様々な震災伝承施設や遺構、石碑・記念碑が設置し整備されている。現地において、当時何が起き、どのようにして対応し、国内外から御支援をいただきながら今日まで復旧・復興の取組を行ってきたのかを、感謝と共に伝えている。いままで訪問いただいた方には、1つ1つの体験や経験が共感を呼び、知識となって防災行動に繋がっており、伝承することの重要性をあらためて認識している。防災や減災、地震や津波などに関する様々な「学び」や「備え」に関する様々な取組や事業を紹介し、これまでの防災に対する知識や意識を向上させるとともに、地域や国境を越えた多くの人々との交流を促進させ、災害に強い社会の形成と地域の活性化に貢献する活動が始まった。

21世紀は巨大災害の時代と言われている。感染症や放射能など見えない脅威に対しては、不安や偏見が2次災害を拡大してしまう。不確定で未知なリスクに対しても、個人や地域での認識や準備が、突然の異変に対しても落ちついて判断し、共に協力して対処できる要となる。その教育や研修の場として震災伝承施設等を是非、活用いただきたい。